

～愛すべき職場～ 今回はリハビリテーション科の紹介です。

福島病院リハビリテーション科は、月間症例数が平均で外来1,400件、入院700件(4月実績)では合計2,161名と、当院で最も患者さんが多い診療科のひとつです。当科では、医師(リハビリーション科専門医)、看護師、理学療法士および作業療法士による医療連携体制で、リハビリテーション科医の下、常勤の理学療法士4名、看護師1名、あん摩マッサージ師1名、ならびに准看護師の助手3名および理学療法士をめぐらす学生スタッフ1名(3年生)が日々診療に従事しています。

[医療師]リハビリテーション

脳梗塞等/リハビリテーション	脳梗塞、脳溢血などの脳血管障害、エーカンソン病などの神経疾患、筋骨格障害による運動機能障害など。
運動障害/リハビリテーション	筋肉や筋膜などの筋肉骨骼疾患およびそれらの術後の生活復帰、社会復帰、スポーツ復帰困難者。
脊髄症/リハビリテーション	筋膜、慢性關節筋性筋肉痛(CPPD)、筋弛緩など。
<対応から>院内	<対応から>院内

[看護師]看護部

看護部は、お年寄りの皆さんに到着して、その基本的活動能力の低下を認めた際、運動療法や日常生活に対する援助を行っており、家庭や施設など日常生活への支援や、入院への準備を手助けしております。専門看護士は、患者さんの状態に応じて個別化された巡回看護にて必要となる動作や生活扶助の手際をとる事と、あるいはスムーズな運動療法の理解と、お手伝いをする考慮として動作の改善と身体機能の維持を行なうのが治療をすすめます。また、医師や看護師と共に、医療行為を実施し、医療や看護の知識を教習などを行なっています。

[理学療法室]理学療法室

理学療法室は、主に小児の理学療法(足底症、椎間板ヘルニアや腰椎狭窄症など)、筋膜の癒合の遅れ、声や音声の障害などの原因によるコニクニケーション障害に対して、これら問題の本質や発現メカニズムを明らかにし、対処法を抽出するための検査・評価を実施し、必要に応じて訓練、指導、治療、その他の援助を行ないます。さらに施設内理学療法室の運営の他と、第3回健やか人口の講義などを行なっています。

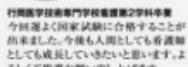
[理学療法室]

主に施設外理学療法へ通院する理学療法師などに対し、急性期(炎症期)を脱し、回復期(炎症から離ね)へ(理学療法後期)の治療に対し理学療法や電気刺激、マッサージなどを行なっています。

～当院の特徴～

本院別院リハビリーションの治療時間は原則でも約60分で、当院での平均的な治療時間は約40分(40分から)時間以上になります。そのため、治療者と患者さんとの密接な連携と専門性の高い治療を心がけています。また、医療技術以外にも、理学療法士准看護師(専門学校1校、大学1校)より医療実習生を受け入れ、リハビリテーション医療に対する医療教育を実施している点が特徴的です。

新卒職員紹介



大阪府立看護専門学校卒業生
これからまだ勉強することばかりですが、宜しくお願いします。

肺機能検査について

(スピロメーター HI-801)

測定範囲：肺活量測定



L肺機能検査とは？

肺機能検査とは、肺の容積や定容を出し入れする肺機能のレベルを調べる検査です。多くの呼吸器疾患の有無が、当院で行なわれているのはスピロメーターといつて測定用機器の呼称です。

肺機能検査で何がわかるか？

肺機能検査は、呼吸器疾患の有無などを確認する肺の病気を考えられる時に用いられる検査の一つで、肺の機能を評価するための検査です。また、低酸素血症の治療にも重要で、肺機能の測定は臨床的意義があります。

①肺活量 ②深呼吸量 ③用力呼気量 (FEV1) ④一秒率 ⑤一秒率 (FEV1%)

① 肺活量——肺を最大限に充満したときに、すべての空気を吐き出された量を調べます。(成年女性で約4500cc、女性で3500ccが基準値)

② 深呼吸量——年齢や性別から算出した予測値(基準値)に対する、実際に吐き出せる空気量を調べます。

③ 用力呼気量——胸を最大限に吸い込んだ後、一気に吐き出された空気の量を調べます。

④ 一秒率——用力呼気量がうちの最初の1秒間に吐き出された空気の量を調べます。

⑤ 一秒率——用力呼気量に対する1秒率の比率を調べます。

(70歳以上の参考値)

⑥ 一秒率………息を吐ききった後、まだ体内に残っている空気の量を調べます。

脈動機能検査の方法

まず、呼吸を深めます。鼻孔ノーズクリップで止め、呼吸装置を接続したマスクマスクを口につけ、静かに呼吸を可逆呼吸(吸い出し)した後、一度大きく息を吸い、次に大きく吐き出します。さらに一度大きく息を吐します。これで2~3回の測定になります。

静か呼吸を2~3回の測定した後、大口を含む、特に喉を含む呼吸を計測します。呼吸率は全くありません。

肺機能検査結果の判定

「正常値」の60%未満の場合は、肺機能や呼吸機能など、肺の空間を入れる器質がからむる慢性肺疾患等と考えられます。

1秒率が70%未満の場合は、気管支炎、慢性的支氣管炎など、空気の通り道が狭くなる呼吸器疾患や喘息等が疑われます。

1秒率、16歳ごとに近い値を標準とするとき、正常性肺疾患が疑われます。

1秒率、16歳ごとに近い値を標準とするとき、正常性肺疾患が疑われます。

正常性肺疾患が疑われる場合、呼吸器疾患などの可能性があります。

正常性肺疾患が疑われる